WASON
HQ
1104
J94 1
Aug. 1901
no. 515

明治三十四年八月三十一日

女學雜誌

明治三十二年五月十四日第三種郵便物認可

第五百十五號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百十五號目次

◎社說
經濟時勢論
軍備大擴張論
學校の月謝は尙低し

◎隨感
人世眞面目◎旅行多日（蚊張城内◎蜘蛛の巣◎蛾虫燈火を慕ふ◎愛鶏客の去らる◎家内亦野の如し◎農家樂し）望月二郎君と田口卯吉君

◎瀧頭餘感…………新井奥邃
自問◎手紙◎更に問ふ◎我の言葉（青年と共に靜に思ふ）

◎女學
村夫子夜話（教育者は猶ほ醫者の如し◎拙なき術く◎苦心◎財政難裏中の教育事業◎兒童教育の發足點◎貧困乃ち學境なり）

◎家庭
臺所ラボラトリー

◎評論
基督教の悟道

◎講壇
夏休前、最后の說教

◎雜錄
自轉車武道
氷冷々
細湖舟餘波…………青柳有美

◎寄書
初戀（在米紐育野上無慮庵）

學習院 納所辨次郎先生
高等師範學校兼東京音樂學校 田村虎藏先生 共編
教科適用 **幼年唱歌** 二編中巻近刊

初編上中下二編上巻既成壯快なる繪畫入洋製美本壹冊正價十錢宛郵稅二錢郵劵代用不苦（以下續出）

二編上巻目次（口繪賴光鬼退治の圖 春の野、蝶々、大江山、池に金魚、兎と龜、鶯、蜻蛉、松山鏡）

●**本書の特色**

一、本書は高等師範校、學習院の小學科唱歌教授に從事せらるゝ納所、田村の兩先生が熱心研鑽の上編纂せられたるものなり

一、本書は、主義目的なき雜駁杜撰なる在來の唱歌を排して尋常一學年より高等四學年に至る迄各學年各學期に配當したる**本邦唯一**の教育的唱歌集なり

一、本書は題目、事實、歌詞、曲節共に兒童の心情に訴へ各學年の程度に鑑み分量の標準を示し快活優雅趣味津々眞に唱歌教授の目的を會得せしむる教科用書なり

一、本書は毎卷毎頁毎に**壯快なる繪畫**を插入し印刷鮮明紙質好良注意周到最も至れり盡せるものなり

一、本書は高等師範學校、學習院、女子高等師範學校の**教科**に**御採用**の榮を得從て教育社會空前の好評を博し既に再版出版せるものなり

高等師範學校鈴木米次郎先生編
夏期講習會用書 **日本遊戲唱歌**

第一編二編既成七月一日發行壯快なる繪畫入洋製類美本壹冊正價十五錢郵稅壹冊二錢郵劵代用不苦（以下續出）

第三編目次（おはよー、指遊び第一てまりはまろ〳〵、阿波の鳴門、指遊び第二五匹の鼠、金鶏、樂隊大進行附守り歌）

本書は專ら小學校、幼稚園、家庭等に於て用ゐる遊戲唱歌の材料を供せん爲特に先生の御實檢に依れる新意匠の遊戲唱歌又は運動の五六種を毎編掲ぐるものなり

幼年唱歌 二編中巻目次豫告
○虎○日本武尊○日の丸○稻○神武天皇○蜜蜂○牛と馬○海

發行所 東京銀座三丁目二番地 **十字屋** 電話新橋千二百五十九

書籍及樂器目錄は郵稅二錢封入申込次第進呈

●女學雜誌定價表●

前金

壹册定價 拾錢
半年分定價 壹圓拾錢
一年分定價 貳圓
（內國無郵稅）

◎代金は總して前金にて御注文ありたし
◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事
◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ眞に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かれて御承知被下度候

廣告料

一行（廿二字詰）一回 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

送金

送金は東京麹町郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割増にて計算せられたし

女學雜誌

第五百拾五號

明治三十四年八月三十一日發兌

社説

經濟時勢論

◉明治廿八年、日清戰爭の比であつた、領土は擴ろがり、償金は取れ、國内全たく狂するが如くで、起業熱は天に達する程の勢ひであつた。此時、或人が勝海舟先生に面して、日本の經濟も先づ安心であると言つた所ろが、非常の見幕で叱られた。ナニが安心だ、日本の財政は之から紊亂して、明治政府はとう／＼夫で倒れるのだ」と言はれた。而も先生當時病蓐に在るに係らず、徳川一門の家令を呼んで嚴びしく命令されたは、「此際、決して與に乘つて景氣に浮れてはならぬ、毫しでも、會社や株などに手を出してはならぬ」と言ひ渡されたが、何分アノ比の大景氣であるから、多少は不服の人もあつた。先生も亦た老ひたり、時勢の隆んなるとを知られぬのである」と誹つたものも有つた樣である。然るに其後着々として此の豫言が適中する所ろから、當時此話を聞かれたる島田三郎君などは、之を以て海舟先生の識見を證し、屢々毎日新聞などで之を追賛せられたるとである。

◉實に果して、其の豫言の如くとはなつた。今は正さに其の絕頂に達したかと迄でに思はれるが、然しマダ／＼之ては止まらぬとであらふ。前途果して何の樣になる乎。加之今年の米作がもし凶るかつたならば（不幸にして、風もあらふ、多分凶作でもあらふ）彌よ以て大した騷ぎである。

◉此際、外資輸入の問題があつて、目今は大抵之を氣構えて居る樣である。今の所ろでは、其の利害を論ずるものがある、又利率の高い低いを言ふものがある。然し、之が一層甚だしくなると、ソンナ事に頓着する餘裕はない。利が高からふとも、サキが何ものであらふとも、夫に搆はず借りる樣に

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

なるのであらふ。

●もしかゝる種類の外資輸入と云ふとが行はれたならば、一時に俄か景氣が附いて、投機熱が再たび熾んになり、暫時は人皆な陽春三月の心持になるのであらふが、之が即はち最後の大困難の初めである。

●考がえて見れば、情けない樣な世の有樣ではあるが、然し別段變つたとでもなく、今更ら急に失望するともないのである。財政困難と云ふとは、不幸には相違ないが、心得次第では決して永久の不幸ではない、反つて幸運の基ひとなるものである。

●すべて經濟の事は、一窮して亦通ずる川の流の如きもので、困らねば仕方も立たず、奮發も起らぬものである。夫故、斯る際に因息手段を止めて、斷然たる革新の方を執り、心を入替え、遣り方を一新して掛れば、決して失望などすべき必要はないものである。

●大いに仕上げたほどの人物は、前に一應失敗して、夫から遣り換えたからである。國家の貧富も同樣なものである、何も一時の失策に閉口するとは決して無い。

●左れば、目下夫々究迫して居らるゝ諸君は、決して其日送りの因息を爲ず、又此上、空に頼むやうな山氣をやめて、此の際確乎たる設計を立て、夫によりて一身一家を律するやうに爲られれば、たとひ經濟界が之より惡るくなつても最早心配はない、もし善くなれば則はち自然と溜まるやうになるのである。

軍備大擴張論

●目下政治上の難問題は、詮ずる所ろ、唯一つで、即はち財政困難と云ふとである。而して、財政困難の最大元因も亦た唯一つで、外ではない過度なる軍備擴張と云ふとである。

●夫故、今の救濟方を論ずる人々は、皆な軍備縮小說を講ずるのであるが、之は迚も行はれぬ。啻に行はれぬのみならず、行ふ可らずである。吾輩の如きは、大反對で、一層隆大なる軍備擴張を主張して止まざるものである。

●軍備擴張の目的は決して必戰を期するのではない、但だ戰かはざる可らざる時に、十分に戰かふとの出來る準備をチヤンとつけて置くのである。又、軍備擴張は、たゞ手段ではな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

い、寧ろ目的である、軍備擴張夫自身が國民の元氣たり生命たるものとなる様にするのである。

◉一個人の事を言ふ時には、健康なる精神は健康なる身体に宿ると言つて、切りに躰育などを主張する。國家の健康も亦た同じとで、其の健康なる精神は、健康なる躰力即はち武力と相伴なはねばならぬ。

◉况んや、今日世界に對して、理を通じ義を貫ぬかんと欲する時には、是非とも二つの實力を左右の手に握らねばならぬ。一つは貿易上の實力で、他の一つは即はち軍事上の武力である。而して此の二つは、或人の言ふ如く决して矛盾するものではない。財力と武力とは、同時に發達せしむるとが出來る筈のものである。

◉夫故、吾輩の考へでは、今の軍備擴張などは、マダ〳〵足らぬと思つて居る。なまじひに半途の擴張は反つて害があると見て居る。二十五万人の兵卒位ひを得て之で擴張だと思ふ様などではイカヌ。封建時代すら、士族は四十万人、即はち四十万人の常備兵があつたのである。今日、夫よりもまだ十分の四も少ない人數をやつと作つて、安心するやうなとでは成らぬ。

◉然し、今の様な軍備の立て方では、迚も大擴張を講ずるとが出來ぬ。吾輩の設計は丸で其の根本から組直すので、隨分緻密な說明を要するものであるが、コヽにはソンナ事は言はぬ。たゞ大躰丈けを概論して、同人の注意を乞ふて置く。

◉先づ、常置兵即ち常備兵とも云ふべきものは一万人位ひで宜しいのである。其他は皆な國民軍として編制し調練するのである。男子十四歲以上即はち小學校卒業後より滿四十歲に至る迄は皆な國民軍に編入し、一週に半日づゝ召集して軍事的操練を與へるのである。服は極々簡易な制服にして(法被股引の亞類)皆な自辨で鐵砲は下附するのである。其中、騎兵の如きものは、馬の多く產する地方で、特に擔當し。工兵は大工日雇の類をあて、輜重兵には親方、人入商賣、及び子分達を任ずると云ふ風にするのである。斯様にして、一週に半日、一年に百八十二日、廿七年間で四千九百十四日乃はち丸十又四年餘の調練を爲すので、必ず老練な兵卒が出來る。

◉斯の一方に於て陸軍常備兵の經費を大いに減ずると同時に、鐵道を四通八達に掛け、一層道路と、山路と海路とを便利

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にし、更に一層の金を海軍の方に向けるのである。而して、海軍と貿易事業とを極めて親密に結び付けるので、夫には種々の工風があるのである。

◉斯くすれば、陸軍の方で金のかゝるのは、士官の養成と、士官の月給とであるが、凡そ學校に於ては又別に兵事操練を與へるから、學校出の男子は皆な士官となられる樣にするのである。而して、一週半日づゝ士官の用事がある斗りで、至つて暇であるやうだが、之は所々掛持で敎へるから、士官の數も左程多くは入らぬのである。

◉一週半日づゝの武事敎育は、確かに今の自惰落なる日本男子の氣風を一變せしめることが出來ると思はれる。武士風を隆んにし、精神敎育を興すなどの一點から見ても、軍備擴張は確かに福音の友で、決して野蠻の仕事ではない。

◉蓋し、陸軍を以て國内の叛亂に備えたり、もしくは藩閥の爪牙としたとなどは、一時勢昔しの事で、もはやソンナ時節ではない。今は、世界の上から見て軍備を爲しつゝあるのである。夫には、陸軍制度を斯樣に一變するの機會正に到來て、近々斷行しても毫も差支へはないと思つて居る。

◉序でに申して置くとは、軍備擴張と女學擴張とは矛盾するもの丶樣に言ひ做す論者もあるが、之は間違ひである。女權を大いに發達せしめたものは、眞の武士氣質で、西洋でも日本でも其歷史は明らかに存して居る。今後、男子をして男子たらしむる敎育の隆んになるのは、即はち女學の爲の幸福である。又、女子をして軍備擴張に賛成せしめる樣にせねば、軍備は起らぬ。英佛獨の兵備の元氣は、女子の尙武氣象によつて養なはれて居ると言つても差支へないのである。

◉夫故、女子に尙武氣象を敬慕せしむることも亦た一つの軍備擴張方である。之と同じく、日本の女子をして一層、海と水とを樂しみ、コゝに遊ぶことを平氣に感ずるやうに爲らせねばならぬ。昔しは、神功皇后と云ふ實例もある、日本の女子は決して海に緣のないものではない。ボート遊びや、船旅行に一般の趣味を持たせるやうにするのが、新女子敎育の一學科で、之が亦た海軍擴張の根本となるのである。

寄野趣於詩歌　安問似唐似宋
發狂興於筆墨　何曾效獻效羲

學校の月謝は尙ほ低し

◉舊幕時代の敎育費は皆な國庫支辨であつた。敎師たる儒者も、寺の坊守も皆な國家社會から維持せられたのであるから、自然にお禮と云ふものを取らぬヿになつて居た。今日の世に至つても尙ほ昔の遺傳が一種の習慣となつて居る。

◉今日、一個の敎師が一の學塾めきたるものを設立し、單級組織にでもして敎えると云ふ理想的の敎育が行はれ得る場所では、報謝の仕組も亦た理想的にしても不都合は無いのであるが、多くの敎授者を集合し、種々の器械を使用すると云ふ組織になれば、是非多くの入費を要するもので、自然、一定したる月謝を受けねば成らぬ樣になる。

◉然るに、今日の月謝の程度は極めて廉で、迚も夫を以て擴張するヿの出來ぬのみか、維持さへ迚も出來ぬからして、自然、臨時の寄附金を募るヿになる。

◉然し、寄附金を出すものは、其學校に緣故ある人斗りではない。直接、其學校に世話になつたヿもないものが多く寄附する樣なヿがあつて、夫で學校の設備も出來、擴張も出來ると云ふ場合に、現在其子女を托したる父兄が、責任を盡さぬヿと云ふは甚はだしい間違ひである。此の間違ひの起り易いのは、子女敎育の上に於ける父兄の廉恥が未だ大いに發達せぬからである。

◉實は、他人の寄附で吾子が敎育せられて居る樣なもので、至極恥づべきヿである。左らば、官公立學校に於ては如何んと云ふに、之も亦た同じヿである。公けの租稅によつて成立つたる其學校に、租稅を出した父兄の子が皆な來て居ると云ふのではない。夫故、吾子が至つて廉に敎育を受けるヿの出來る所以のものは、他の父兄の子が來らぬ故で、即はち夫丈他人の世話で吾子を敎育して貰つて居るやうなものである。

◉夫故、敎育上の月謝と云ふものは、出來べき丈け增加し、父兄は出來べき丈け之を擔當せねばならぬ。今日、子女を東京などに送つて居るものは、月十二三圓以上二十五圓位迄を支給する樣子であるが、夫は隨分大したヿだ。二三人も一時に留學せしめる父兄の支出は中々大きなものである。然し、其多分は皆な子女自身の維持であつて、學校に呈納するものとては極めて少額であらふ。假へば一人で一圓乃至三圓位の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ものであらふ。子女一人の大切な教育を頼んで、月に一圓位とは實に少額極まるとてはない乎。

◉左れば、吾輩の考では、月謝と云ふものは、將來大いに増額し、學校は是非夫丈で維持せねばならぬ。然し一時一定に増額しては難儀であらふから、學校に於ては月謝を何圓乃至何圓と定めて、其間を隨意に呈納せしむるの一方もあり。又、月謝の外に若干づゝ寄附するは當然の事であると云ふ樣に思ひ做さしむるが又の一方であらふ。

◉斯の如くにして、私立學校を大いに健全にするが即はち教育普及の根柢である。而して、官公立學校の月謝は非常に廉に若くは無月謝として、可成く貧民の子を入れるやうにしたいものである。

◉有美徒歩旅行ハガキ日記（一）

〇〇とは停車場で相見しのみにて下車せずドロップス一瓶を贈られこの所に着せしは八時頃なり下女あり誰れかに似たと思ひしがそれは〇〇さんに似て居れり察するにこれは駿河美人のタイプなるものゝ如く眼が凹んで鼻が希臘風に飛て出で顔か長からずして圓き方なり一家中第一と認定せし故十錢をティップに與へしが下女の坐付ならずして種々交代する故効能なし廿錢與えし茶代の禮に老主人の來れるを捕えて色々探究せし結果是れより足柄山に上るべくこの附近は南北朝時代の古戰場にして古墳ある由故これも探るべく又七社權現といふものある由故その祭神をも研究すべし（八月九日朝　御殿場　ふじやにて）

隨感

○人世眞面目

水の能く流るゝを見て融通自在のみとする莫れ、彼は重力の大理に順從するなり。煙の廣く散ずるを見て、奔逸自由のみとする莫れ、彼は氣重の玄理に牽制せらるゝなり。彼の良心の束縛を裁斷し廉恥の羈絆を蹂躙などして、之を自由圓轉ぞと言ひ做す族は申すに及ばず、浮薄泛々、たゞ寄邊もなく錨もなげにして世を輕々しく送りゆく人を見れば、人間は輕薄にて世は面白くもなきものと思はるれど、身を殺す迄にして所志を貫徹せんとし、もしくは絶躰絶命の斷崖と云ふ所ろに逢着して、身を投げて其終を克くせんとする底の行爲を見れば、世は是れ眞面目のもの、人も亦た眞面目のものと思はれて、心地清々しくなるものなり。

○旅行多日

家と云ふ吾が根城を出でゝ、多くの日外出旅行するとの出來得る人を見れば、或ひは羨やみ、或ひは卑しむ。其の羨やむものは、執務規律にかなひ、經營度に中り、幾日吾が居る場所を換ゆるとも差支へなきほどの準備緻密なればならんとて羨やむなり。其の卑しむものは、經綸疎薄、關係影響する所ろ狹隘にて、機に後るゝとを恐怖するなどの秘密少なく、古人が所謂る時勢を識れる人にあらずと思はれて卑しむなり。夫れ人世は一日不在の爲め十年損失すると多くあり。苟くも戰場に臨みたる以上は「余は何處にあり」との告示、今の如何なる一般方略の最後にも存する如く、又昔し家康信玄等が將几を据えて決して動かざりしが如き必要のあるものなり。左れば、極忙の主は、一室を出でず、八方に注意するものは座を動かすとなし。

○蚊帳城内

夏は日暮るゝ比よりぞ樂しきに、蚊と云ふもの出で來りて悠遊の妨げをなし、腹立しきほどにうるさく邪魔するなり。則はち蚊帳をつるし、内に燈火を入れ、机によりて靜かに讀書すれば、蚊聲雷波を起して、外に鳴り渡れども、遂に入ると能はず、決してわが靜思を妨たぐることなし。此に於て、初めて蚊帳と云ふものゝ有がたきとを思ふにつけ、人世亦斯の如しと感ず。人世結局邪魔者を滅するは難し、然れど之を範圍以外に追退けて遠く擯斥するの手段なからんや。

○蜘蛛の巢

斯く迄でに蜘蛛の巢の存するを見る、久しく掃除せざりしとかと質せば、左にはあらず、先刻掃き清めたる後、直ちに斯く鄭寧に張りつめしなりとぞ。彼は綱紀を支持して主張を擴ろげ、幾度び破らるゝも決して驚ろかず、日に〳〵張り換ゆる煩はしさをも厭はざるなり。嗚呼斯る忍耐勉强を以てして、安くんぞ遂に獲物なからん。

○蛾虫燈火を慕ふ

虫よ〳〵、何んぞ斯くうるさく燈火を慕ふや。汝、晝出でずして日光を見ず、之をもて最上の光とする乎。而して光は何故に慕はしき乎。其の熱を知らざるなるべし、樂しげに近づ

き、欣喜して雀躍し、則はち焼け死す、左れど此は光明を慕ひて道に殉ずるもの乎、美に戀ひてうかれ死するもの乎、そも〳〵來世を夢みて之に投ずるもの乎。満足せりや、恨めりや、泣けりや、歌へりや。

○愛鷄奪ひ殺さる

吾家に飼える鷄十數羽、一夜にして奪ひ去らる。而も慘酷に締殺じ又は脊骨を壓したらんと思はるゝ形跡あり。道に落せしものによりて推し得たり。此時、余は不意に烈しき復讐心を發こしたるが、後につく〳〵と思へば、復讐心は必らずしも野蠻なるものにあらず。殺されたるものゝ無念怨恨に同情を表すれば、一種の氣我に乘うつりて我を動かして止まず。死者の爲に不義を憤ふる時は、必らずや復讐せざるを得ざる也。たゞ若し此の盜賊が、貧に困して恐る〳〵斯ることを爲しなりと知りたる時は如何のものにや、其の愚かなる顔を見たらん時には如何のものにや。

○室内亦野の如し

茶花と云ふものゝ味ひを面白きことに感じてより、床の間の挿花を日々更たむ。新鮮なるを好みてなり。朝たに露を荷えるまゝに取入れて挿す。晝、胡蝶來つて之れに戯むるゝこと多くあり。夜に入りて蟋蟀亦た之を宿として吟ず。草原に近き茅屋は、室内も亦た野の如くなり。

○農家樂し

農家の花園は、其の田畠なるべし。綠葉收めらるれば、紅花次ぎ、青稻やゝ長ずれば、黄禾熟す。而して、腴地の耕耘せられて平面砥の如くなるや、望み見て沼の如し。芋の葉の繁りて朝霧に包まるゝや、宛然蓮池に似たり。嗚呼農家、勞働の後ち清風を入れ、足を休めて此の園圃を見る。心中樂地多く、村内景色多し。其生涯も亦た樂しひ哉。

○望月二郎君と田口卯吉君

經濟雜誌社員望月二郎君逝けり、田口卯吉君追悼の文あり。之を讀むに、誠意眞情惻々としてわれを動かし、識らず涙の落るを禁ぜざらしむ。況してや、望月君は是れ當代稀有の君

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

子人たり。此人を傳ふるに此文を以てす、眞とに百代の鑑たるかな。掲げてわが同人諸君に示めす。

社員望月君は數年前より肺務に罹り、名醫の治を得て、療養を怠らざりしが、藥石效なく、去る八日午後五時半溘焉易簀せらるゝこととなりぬ、余は君と交ること多年にして、其情親族よりも密なりしかば、今君と永く別るゝに際し、筆を執りて一辭を述べんと欲するも、心緒紊れて制すと能はざるなり、

蓋し君は斷乎として奪ふべからざるの精神を有せり、此の點に於ては君は古武士に恥つるなきなり、然り而して之と同時に君は千百の事務の輻輳するに當りて綽々之を處理するの技倆を有せり、此點に於ては文明的事務家の摸範として傳ふべきものあらん、

我が經濟雜誌社創立の初には、余が亡姉木村鐙子其事務を處理したりしが、久しく之に干與し得べき身分にあらざるを以て、余は君に入社を請へり、當時君は大藏省の官吏たりしなり、經濟雜誌社創立の後三四年の頃は隨分困難なる時代にてありき、而て當時種々の勸誘は余にも君にも來れり、余が富貴利達は却て經濟雜誌を拋棄して他に方向を轉ずるに存するが如く見えしこともありき、而して君の地位は更に有望なるものにてありき、然れども君の心は金鐵の如くにして動かすべからざりき、故に余も亦心を動かさざりしなり、世間或ひは余が富貴に冷淡なることを稱するものあり、然れども余にして君と事を共にせざりしならんには、蓋し薄志弱行の徒たることを免れざりしなり、

我經濟雜誌の事務既に順境に向ふの後と雖も、君の財利に淡泊なること驚くべきものありき、余輩は從來企畫したりし出版事業の如き隨分危險を冒すものなれば、其の始めに當りて余は常に君と議して曰く、其の書にして成らば可なり、如何なる麁紙を用ひ、如何なる表裝を綴るも其の書の無きに勝らずや」と、然るに意外に多數なる豫約者を得るに及びて、君は必ず最新の活字を用ひ、最善の紙料を求め、最美の表裝を爲して、之を顧客に配布することなり、我が社の出版せる書籍にして「ステレオタイプ」を用ひしものなし、君は其の文字の鮮明ならざるを惡むなり、其の用紙の如き其の表裝の如きも常に見本よりも美なるものなり、是れ君が性質として麁雜なるものを造くる能たざるに因るなり、余の如きは斯る塲合に於て少しは社の利益を圖りても可なるべしと思へとも、君の心は奪ふべからざるものあるなり、

君が事務を處するの方法は、世に所謂事務家若くは敏腕家の爲す所とは大に其の撰を異にせり、彼等が事を斷ずるや敏捷に、彼等の書を記するや迅速なり、彼等之れを以て能事となし、世も亦以て長所となすが如し、然れども世間の事務何ぞ斯く急遽に處理するの必要あらんや、畢竟彼等は事務を好まざる者なり、故に之を急遽に決了して其心を他に轉ぜんと欲するなり、望月君は然らず、事務に親切にして十分に整備し了らざる中は安心せざるなり、事を爲すに順序あり殊に雜務輻輳の時の如き必ず順序を手扣に記して、一々處理することなり、此の時に當りて或ひは客の來りて無益の長話を試むるものあるも、君は親切に之に應答して倦まざるなり、然り而して其の客の去りたる後に至り一々手扣に照らし諸事を處理し必ず當日中に結了せざれば止まざるなり、故に事に過失なく遺漏なく遲滯なきなり、之を彼の世に所謂敏腕家が一氣呵成の勢を以て事務を處理し、數々失敗し、數々反覆し、或ひは隋氣を發して、之を翌日に遲延するに比するに、豈に霄壤の差にあらずや、且夫れ彼の所謂敏腕家の事を爲すや其の心常に切迫せるが爲に他の社員の之に對するもの必ず不快の念を發すべし、望月君の胸中常に閑日月あり故に社員は常に愉快を感じて事に當ることを得るなり、思ふに此事や當今の社會に最も欠乏せるものなるべし、余は世の會社員が君の行爲に就いて學ぶ所あらんことを望まざるを得ず、

余は嘗て君の大人太翁氏に聞けり、「慶應の末、君が下總に脫走し、八幡、市川に轉戰し、敗れて家に歸るや、曩れて隊長より領收せる貨幣の中より實费を引き去り、殘餘を隊長に返濟せんとせしかば、翁は斯る敗軍の塲合に於て收支の精算を立つるの必要なかるべしと語りたるに、君は之を聞かずして返還したり」と、蓋し君が性行は常に然るが如きものなり、經濟雜誌社が君に給する所實に微なる者なりき、然れとも君は大約之を親戚故舊に給與したるが如し、君の疾、病なるや余は豫め君と約を立て、君の遺族に給する方法を定めんとしたり、余は實に君をして安心せしめんと欲したりしなり、然るに君は之を斥けて曰く、

厚意謝すべしと雖、恐らくは遺族が之を受くるの權利ありとして、足下を煩さんことを、是れ我が意にあらざるなり」と、

君は政府若くは大會社の當局者として、其家門を繁榮するの技倆を具へたるの人なりしなり、然るに微々たる一經濟雜誌社の社員として、終生陋巷の中に棲息したるは、余が深く君の爲に悼む所なり、然れとも君の希望は平和にありて榮華にあらず、君の目的は事業の完成するにありて名利にあらざりしかば、其の宜く荷ふべきの名譽は凡て余に歸し、宜く受くべきの利益は凡て他に頒與して顧みざりしなり、余從來人と交際する少しとせず、然れとも其の心の清潔にして其の行の親切なる、君の如きもの實にあるなし、嗚呼是れ豈に獨り當今に得難きのみならんや、蓋し之を千古に求むるも、其の儔を得ること難かるべきなり、

◉有美……ハガキ日記（二）

（十日朝　沼津　桔梗屋にて）

有美の大發見！

そろ／＼面白くなり來れり、昨日元御殿場にて定朝法印御作庚申像の看板につり込まれて這入り六十一年目でなくば開帳してくれぬといふ像を廿錢で特別に開帳せしが、坊様は拜むためと思ひしと見へ讀經なとし暫時之を聞きしのみにて加ふるに光線入らず能く見えざりしもその坊主の設け居る安産講の註釋が面白し曰く「女は尻が冷へるといふが決して十三までは冷へるものに非ず十三になると月經が出る故尻の熱が子宮に吸取られるなり是に於てか冷えるの月經は子宮の呼吸をするの故、その時に口があくので月經前後に姙娠するなり」と。そのうちに子供の若きもの二三人來れる故この坊主奴こんな事にて女の情を動かしヒッカヽるに非ずや必ず若き大黑あるべしと寺所を窺きしが遂に見當らず。元御殿の警察署にて署長より附近に人魚のあるを聞きし故態々至りしが見せず。然し其推古帝の時聖徳太子の說教を聞くため石山寺に上りしものなりとの言に徵し其の鱗は甚だ粗なりとの旨によりその印度産のミイラなるを發明せり。若し既に發見者あらば致方なきも然らずば是丈けにても五十圓の價あり。

瀧頭餘感

新井奧邃

自問

吾が志さす所の者何に事ぞ、
吾が思ふ所の者何に事ぞ、
吾が心の學ぶ所の者何事ぞ、
吾が身の行ふ所の者何事ぞ、
行つて而して至る所の者何事ぞ、

手紙

說明すべからざる者は記し難し、其事の說明すべからざるにあらず、只だ世の狀態之を聞くを赦さざればなり、縱ままに之を說明すべからず、是を以て涙だ紙に落つ、此れ悲歎よりするに非ず、是れ一つの感動自りす、即ち、上界の弦響の此の世の周圍を振動せしむる所のものなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

嗚呼、余、一大總合の終時の爲めに、神の來れるを輔けんと欲す、其來る所は何の地なる、曰く、吾が身の中ちの地なり、吾れ若し宇宙の爲めに大築せんと欲するも、吾が身の基礎完備するにあらずんば事の能く爲すべきなし、斯の如く、余謹愼して屋隅の石の吾が身に形ちつくらむことを求む。

凡そ戰勝は迫害に因て得べし、而して賜與の物は献進する所の量と品とに從ふ、理義は天使よりも權有りて施行し、感情は聖書よりも誠とを以て指示す、變遷なる哉、ああ、變遷なる哉、無邊の柔善余か心身に渉る、余の情ろ未だ曾て今日の如く柔善なるはあらざりし、余が足は定まらざるにあらずして輕ろし、吾れの心ろ靜々として無形的に於て旋轉す、昔し吾が足を束せし者今ま足より擧がる、恍然として殿堂の殿堂を見るが如く、惚然として宗敎の宗敎を思ふが如し、神の近きこと未だ曾て此の如きはあらざりしなり、

至誠は限り無し、限り無きの方面に限り無きの要點あり、今ま言ふ所は唯だ余が今ま立てる所の一面の一小點に就きて云ふ、至て小なりと雖も、亦余が思ひの流れにして、生命の大磐より湧き出つるものなり、惟一公の御名に於て謹んて之を君に呈す。

運之以常行、堅之以實業、根本日大、而枝葉時繁、源淵愈深、而川流益遠、

更に問ふ

世に冥然として問を爲す者有り、此れ甚だ多し、又物を疑ひ、問ふて之を辨へんと欲する者有り、若し其人、事の是か非か、道の假なる耶眞なる耶の惑ひあり、其志さし誠に之を諄求して以て其行事に益せんと欲せば則ち徒に信じ徒に知て而して實踐せざる者に勝るや遠し、又、更に問を爲す者有り、其人既に自ら知ると雖も亦以て之を衆人に徵して其知を天下に實にせんと欲するが如し、是れ廣感深情の人なり、嗚呼、天下の廣き豈に明德者なる人無しと謂んや、夫れ有焉、然り而して世常に之を見る能はざるに苦む如き者は何ぞや、是れ時勢の其人と隔絶して、相容るること能はざるか爲め耶、抑も上帝の殊命有り而して之をして然るを致さしむる者也る耶、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

常々にして我が心身の中に位いし而して我生に非る者有り、是れ何ぞや、浩然として我が心身の中に旋轉し而して我れ自り之を作すに非ざる者有り、是何ぞや、巍然として我が心身の中に峙たち而して我意の凝滞に非る者有り、是何ぞや、靜々として我が心身の中に安んじ、生息因て以て動き且つ貫ぬく者有り、是何ぞや、凛然として我が心身の中に感應し而して血氣と和混合せざる者有り、是何ぞや、豁然として我か心身の中に敷褒し而して我をして開進發明せしむる者有り、是れ何ぞや、又神々乎として我か中に至て輕くして倫ひ無く、外物を通徹して之と付て相牴觸せざる者有り、夫れ是れ何ぞ也、

不我の言葉

（青年と共に靜かに思ふ）

吾は凡人なり、換言すれば、猶ほ人の如きなり、嗚呼深く青年を念ふ、吾之を愛して之を重んず、今ま不我の言葉數條を錄して聊か相共に靜かに思ふの助けと爲さんと欲する所以なり、

凡そ人たる者一大標的を有せざるべからず、然らずんば、其當さに行きて止まるべき所を知る無く、終に眞實中正の道に達する能はざるなり、

何を一大標的と謂ふ、是れ正大廣明眞實惟一の榮光にして、大太陽の如く、宇宙に表彰して全人に示すものなり、此れ吾儕人爲を以て立つべきの目的に非ず、此れ天の中央に常有して我に指示する所の者にして、即ち貴神の榮光たり、今ま天下此の標的を失へる者久し、我儕若し此の如くにして變せずんば、或は社會を挙ひて沈淪するに至るも未た知るべからざるなり。

何を以て之を言ふ、曰く、所謂標的なる者は、我が眞志の立つ所に由て顯現する者なり、我と相待て而して我を導く者なり、然るに今我儕頑然、天の本意を認めて之に奉ずるの志を有せず、又人の公性に循て以て道を修んとするの思ひ無し、我れ唯此の志を行せず、故に天の我に命する所の者何事たるを知らざるなり、我れ唯此の思念無し、故に天律我に晝せる所を執行して我が職分を盡さんと欲するの意なし、是れを

以て心知蒙昧に、人格喪亡して、危殆不安の生活を經歴す、夫れ此の如し、我れ焉んぞ能く其必ず沈淪なきを保たんや、是故に之を言ふ、

輕躁と無く、沈潜と無く、才智と無く、頑愚と無く、凡そ人格本然の善性美心に悖戻する者は、皆卑野なる動氣にして、私慾の發に非るは無し、之を以て謀れば則ち此れ詐僞と爲り、之を以て行へば則ち此れ暴動と爲る、其程度品格、人々各々異なる者有と雖も、其進で暗夜の路に至り、長じて沈淪の子と爲るもの、未だ曾て同からずんば非るなり、

夫れ此の卑野なる動氣、此の私慾の發なる者は、常に我をして標準に背かしむ、此の者、行くとして我が前途を謬らざるは無し、書に聞く所の、誘惑常に我と偕に存する者即ち是れなり、我れ若し之を滅ぼさずんば則ち我れ必ず之に滅ぼさる、是故に我等實戰實勝を要す、徒に研究講釋の類を以て學と爲すべからず、是れ惟一標準の示す所なり、

古に云く、惟れ聖も念ふなければ狂と爲り、狂も克く念へば聖と爲ると、我が志業の後來に大成する、亦今日の克く思念する所に由らざるはなし、而して其思ふや、必す靜かなる

を要せる者なり、

諸葛武侯云く、靜かにして以て身を修む、又云く、寧靜に非ざれば以て遠きに致す無しと、明道程子云く、性の靜かなる者以て學を爲すべし、又云く、學で氣質の變るに至れば方に是れ功有りと、夫れ其性本と靜かならざる者と雖も、若し學んで以て其氣質一變新化するに至れば、則ち亦以て靜かなるべく、乃ち進で以て眞學を修むべし、而して是れ即ち所謂功有るものなり、或人之を聞て謂て云く、是れは則ち修養にして異教者の貴ぶ所、若し夫の神を信ずる者は之を須ひずと、答て曰く、是れ罪を天に得る者なり、夫れ修養の我が信望に於る、其相關し相待つ者、猶ほ我が身の我が心に於るが如し、兩々宜く相離るべからざるなり、夫れ眞の修養は愛心に本づく者にして、而して我が修養に因るに非れば、則ち天愛亦我れに寓するを得ざるなり、

抑も本然の權能の我が中身に消亡せる者は何ぞや、吾人常に生意生力を外雜の事に費やすを以てなり、故に我等當さに心靈を凝集して專ら精力を先務に致すべし、先づ宜く頭腦を明かにすべし、心胸を淸くすべし、憤然自立し、眞實の標準

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に於て希望を起すべし、果して之を能くせば、我が權能其時を以て衷情より流發し、浩々然として其身體に充溢せむ、是れ天德の我に開達する者なり、世人此を思はむ、此に意なく、平常、危變暗黑の夜に蠢居して、而して其夢めと覺めとを分つなきなり、是れ豈に人の性ならんや、

夫れ高尙なる生氣は必ず死滅せず、神化の天勢之を繼發すればなり、野卑なる動氣は長く生息するを得ず、開新の大力之を消散すればなり、故に宜く人の人たる所以を尋ねて、生命の生たる所以を究むべし、其一旦豁然として淸淨光明の道に醒覺するに及べば、吾人の生命復た美を致し而して以て至善の地に達するを得む、

是の開新の道たる、發育に因て社會に運行する者也、生死盛衰の天下に於る未だ其養はるる所に因らざる者有ざるなり、養ひにして足らざるか、生則ち飢ゑ、養にして當らざるか、生則ち疾む、凡そ生物其養を要せざる無く、而して人を之れ甚だしとす、其形軀固より養を要せり、而して心靈尤も然りと爲す、人の心、其夢め醒て一旦眞養を得んと欲するに至れば、則ち其要求する所の者は誠に惟精惟一なる修養に在るなり、單に形體を養ふ者と其輕重難易豈に同日にして之を言ふべけんや、靜かに思はざるべからず、

曰く、所謂惟精惟一の修養なる者は何ぞや、曰く、天の養ひ有り、己れの養有り、(今ま「自養」と言はざる者は、其用法余が意に非ればなり)、天下の養有り、人を養ふに此の三養を以てす一を缺くべからず、必す三者を要す、而して天養は固より其本たり、是れ人を救贖せらるゝの神愛、生命の氣息にして、人體に接して還旋する所の神律なり、夫れ唯だ我に接して還旋する神律なり、是を以て天養は、獨り自ら我に降行するを得ず、必ずや、我れ己れの養を以て之に奉じて之を助け、而して又天下の養の之を贊成する者有るに因て、而して後ち能く行はるゝ者なり、其養たる亦精一を、極めざらんや、

天の養と天下の養と己の養と得て聞くべきか、曰く、今ま姑く其用を短言せん、所謂己れの養に二有り、一は則ち知の養にして、因て以て上天の榮光を認る所の者なり、一は則ち愛の養にして、是れ眞人の火德を社會に熾んにする所以の者なり、夫れ此の知の養はざるべからざる所以のものは、蓋し凡

そ天命に違ひ人性に悖る者は開發生道の範圍に在らざる者なり、而るに當今の時誘惑常に我と偕に行て而して我を此の非命に陷しいれんと欲す、故に我れ若し明かに眞實の標的を認めて而して其指示する所に從はずんば、則ち終に或は天下を率ひて沉淪に致すも未た知るべからず、是れ此の心の知を養はざるべからざる所以なり、

而して此の心の愛の養を要する所以の者は、蓋し天上と無く、地上と無く、古往今來を貫き、人は皆我が同胞たり、是れ固より一視同仁せざるべからず、然り而して此の不運不快なる地球に在ては、我れ殊に又其民の傷める心を通感して能く之を已れに體し、而して盡意竭力以て之れが安身立命を圖らざるべからざるなり、是れ則ち此の心の愛を養ふを要する所以なり、

夫れ此の如く養へる所の知愛二者我が一心に相貫き、躬行實踐以て眞道に於て樹立せば、則ち天祐厚くして天養吾に充つ、（天養は前葉に見ゆ、）然と雖も亦此のみにして足らず、必ず衆之に應じて之を扶くるに是道を以する又已れの如くにして然る後ち我が心身完全の養を得て精靈隆盛を致すべし、故に云く、人を養ふに三養を以す、其一を缺く可からずと、故に天下協同大和するに非れば精靈我れに盛なるを得ざるなり、若し知愛の養其當を得ずして心靈暢達する能はざれば則ち開化の道其人に充塞して其身斃る、嗚呼教養の時義其れ大なるかな、今ま天下の心、大に餒ゆ、民心自ら開發の道を其中に傷賊し、偕て其當然の養を得ざるなり、夫れ身餒ゑる者今ま已に多し、而して其心靈衰頽せる者に至ては益々甚だし、

然らば則ち天地の大勢今ま行はれざるか、曰く、何ぞ夫れ行はれざらんや、今ま天下の心皆餒ゑたり、餒て而して自ら其餒たるを知らず、人其心に於て快然たる通感無し、悅樂の生命既に其胸戸を脫せり、而して彼れ自ら起て之を求めず、之を養ふ所以を務めず、此れ豈に人の知ならんや、所謂本然の權能の我が中に消亡せる者此に於て亦見るべからずや、然と雖も當さに眠むるべき者必ず眠るべく、而して起きざるべき者は起るを得ざるべし、是れ乃ち大勢の駸々乎として行はれ、進で我が衷情に入る所以の者なり、故に天下將に裂けんとす、家人將に相敵せんとす、夫れ時、時の如きは、已に去れり、

舊時は死せり、既往の者は挽回すべからず、修覆に用なし、世に稱する所の文明と云ふもの不遠に斃れむ、是れ勢の必至にして、救道の結果なり、嗚呼喜ぶべし、

是故に吾が愛する所の者、重んずる所の者、青年よ、（前途に盛んなる者青年ならざる無し、希望の遠きに及ぶ者青年ならざる無し、生命の深く存ずる者青年にあらざるは無し、而して永世の童子たる者所謂青年にあらざるは無きなり、）故に靜思躬行相共に能く養て以て善果を來たすべし、善愛の富を致すべし、善愛の富は善果なり、宜く萬づを與へて、而して一つも私に求むる勿るべし、果して之を能くせば、善愛の富み到る、故に人を扶助して其勞を感ずるなし、是れ謹んで貴神に事ふる所以なり、

然と雖も辛戰苦鬪を經るに非ざれば是れ能はざるなり、嗚呼難ひかな、殆んと或は能はざらん、百中一も能はざらん、知と戰ふは易く、情に勝つは難し、身を殺すは易く、永く天に奉ずるは難し、敵人家に在て斷ずべからず、間諜已れに存して覺る可らず、大義の爲めに私心を去り難く、永遠の爲に目前を轉ずるに忍びず、嗚呼是の勢ひの行はれざる者は、勢なり、而して日夜常に吾人の中に有り、是れ誘惑我と偕にする者にして、現事なり、史談に非るなり、活物なり、枯骨に非るなり、親かく其身に於て機變の巧みを爲すものなり、物黑くして、我に白となり、氣寒にして、而して己れに暖、是れ千邪萬魔の現に我に在て而して我を使役する者なり、我れ其靈獄の中に縛がれて、人たる權能を得ざるなり、若し決意獻身、神劍を振ふて以て靈鬪すれば、久ふして而る後ち之に勝つ、誠に難ひ哉、然と雖も、眞實健康の生命、天公快樂の心情、未だ多少此の如きの人を得るにあらずして而して能く之を天下に致すべき道ち曾て之れ有らざるなり、　榮光標準

の指示する所の者此の如し、

⊛有美……ハガキ日記（三）

（十日午後蒲原にて）

元御殿の坊主大非僧がヒソソにて水注ぐ如く生の頭に南天の葉にて水注で曰く『甘露の水を注て煩惱の炎を滅除す』と然し仲々煩惱の炎が消えた樣にもあらず然し『衆生佛戒を受くれば諸佛の位に入る其位大覺に同じ』ついでながら般若婆羅蜜多心經を頭にのせてくれし時は何んだか腦の邊は輕くなッた樣な心地せり。昨日は足柄山に上りしが長く草鞋をつけざりしことにて今月の疲れ非常にて足を動かずくかモヤきなり。加ふるに天候甚だ面白ろからぬ故田子之浦其他富士に關する風景の探險は之を見合せ今朝三島の官幣大社に至れり事代主を祭りし所とのことなるが末社に酒神社め神社船崎社などあり甚だ意味あるべし鈴川にて下車せんとせしもチムクテイヤなりし故蒲原まで來り是所に下車して見しが何もなく少ゝラない、となり、昨日參考のため。決して贅澤に非ず。駄馬に乘りて足柄峠まで縣の下より上りしがその苦しみと疲れとは歩行にまされり。沼津の湯にて藝者を今朝見しが背に外科用油紙を當て汗を衣物に通さぬ工風し居れり桔梗屋の娘はい○○○夫人およしさんの如し。

村夫子夜話

（一）教育者は猶ほ醫者の如し

學校に生徒を集めて一級何人と云ふ一まとめの教育を施こす樣になつてから、兎角『教育の本色が個人的にあること』を忘却する樣になつた。學級組織は素と已むを得ざるより起つたとで、教育者に不足さへなくば、一人づゝ個人的に教育を授けるのが理想である。宛がら、天が親に命じて其子を教育せしむるとき、代る〲一人づゝを與えて順次に成育せしむるが如くする筈である。左れば、たとひ已むを得ず學級組織に及したりとも、もと此の本色を記憶して出來べき丈け個人的の教育を施こす樣にせねば成らぬ。乃わち、生徒銘々の現狀を診察し、一々之に適する藥を與え、其特得の天稟を引出す樣にせねば成らぬ。此心得を稱して「教育者は醫者の如くすべし」と云ふのである。醫者が、樣態を問ひ、脈を視、鼓動を聽きて而して后ち現狀を判斷し、之に隨つて藥を盛ると同樣の工夫を以て、教育者も一々診斷する所がなければならぬ。釋尊が說法に、應病與藥と云ふとがあるが、說法も亦た一種の教育であるからである。フレーベルなどは、此の主意を、其新教育の一項目として居るほどであるが、今日の教師方は兎角、自己の醫者たる格式に注意せられぬ樣である。教育者は一見して書生の性質を鑑識し、又其の居動遊樂によつて心身の狀態を識認し、日々其の顏色風采を察して藥料を調のふる活手段に工夫せねば、其の教育は自づと死んで仕舞ふものである。

（二）空を衝くの苦心

伊庭想太郎氏が山岡鐵舟の劍を語つて申されたる談に、「自分等が敵を禦ぐは、喩えば三角形狀で、其の尖頭を敵にむけて僅かに左右に外すのであるが、山岡先生に至つては、一身悉く開放して、何處も明いて居るから、試みに之を突いて見れば、何處も煙の如くである、少しも手答へがなく、少しも應

じて禦がれぬ、たゞ空を突く如くであるから、遂にコチラで疲れる斗りである」と言われたが、教育者が學徒に向ふ時の心持に丁度之と同じことがある。凡て適中したる教育が渠の心に徹する場合は、眞に間髮を入れざるの刹那で、乃わち渠が心の潮湧き、渠が情の火燃え、頭腦滿口を開ひて眞理を受入れん呑込まんとする高潮進來の氣先に乘じ教授するのであるが、渠にして毫もかゝる要求の起らざる時、即はち少しも其の氣合の乘らざる時に於ては、如何んとも教育の施こし樣がない。白痴教育などの苦心は實に此にあるので、何の慾もなく、何の氣も乘らず、何の刺激もないものに對して教育を與ふるは如何に難いかと云ふことが分る。之に比較して見れば、尋常の學徒などは、餘程教え易いのである。ドンナに宜しくない癖があるとしても、既に癖がある丈が敵として打擊を施こすに目當があるのである。

（二）　財政難裡の教育事業

押川君が支那に行つて支那人教育の事を李鴻章に談ぜられた時は、例の露清密約の調印を迫つて、期限が數日后に在ると云ふ多事多忙の場合であつた相ナ。押川君は態と無紹介で突然李氏を尋ね、教育の事で會ひたいと言われた所ろが、病中であるに係はらず接見せられた相ナ。室内で杖をつき、やゝ苦しげにして出て來られた相であるから、押川君から然るべく挨拶し、サゾお世話しく又御苦勞の事であると言はれた所が。自分は老人の事であるから、大抵半分は病氣であり升、もし病氣と言つてお話を聞かねば、何日も承はる時がありません、又アナタ方が遙々日本から來て我國人の教育の事を心配して下さるのに比べれば、自國に居て部屋の内で心配する位は何んでもありませぬ、教育は國家百年の事でありますから、目今多事であるからと言つて棄てゝ置くことは出來ませぬ」と如何にも分り切た悟り切つた態度で答え、滿州問題が囂々として、抗議、壓迫、二つ乍ら眼前に迫る刻下の多忙を少しも念頭に置いて居らぬ樣子であつた相ナ。

之につけて思ひ出すは、明治の初年、木村熊二君や大議見元一郎君が、外山正一君等と同もに米國へ行かれた時は、幕府が八百万石を奉還して僅かに駿州の尺地を貰ひ、徳川の財政大困難の場合であつた、木村君などは當時の壯士で、時の政

府に不平ではあり、面白くはなし、イッソ亞米利加へでも行つて見樣と云ふ氣になつて、俄かに決定せられた相ナ。夫で勝サンが當時駿河に來て居られたから、行つて話すと、狹いあばら屋の破れた疊の部屋で、澁團扇などを遣つて居られた相ナが、例の如く連りに冷かしたあげく、行くなら行けと言つて小判三百兩を與へられた相ナ。

惣べて教育は百年の事業であるから、目前の貧乏とか世話しいとか云ふとで放つて置てはならぬ。長くかゝるものほど、一日も早く着手して置ねばならぬ。

(四) 兒童教育の發足點

兒童教育法の誤まらるゝと、到る處ろに於て見ることであるが、其の尤とも多く誤まらるゝもの、教會の日曜日學校の如きはあるまじ。之れ甚はだ高尚幽玄なる眞理を教えんとする柄の事で、誤まり易いのも無理はないが、所詮は、其の教授法を考へぬと云ふ怠慢の罪を容すとは出來ぬ。天國、地獄、罪、救ひ、上帝などの觀念は、容易く啓發するとの出來ぬものである。兒童が既得の經驗を捉らへ、之に新智識を注入する觸接點を能く考へて、活きて面白く樂しく聞かせるには、迚も今日所々の教會堂に於て行わるゝ如き方法では出來ぬとである。米國のデュ、ボアー氏の著作は、即はち此の日曜學校の兒童教育法に革新を與へたもので、近年かの地に於て嘖々たる評判のあるもので、遂には一般の兒童教育法に迄で多く貢献して、非常に喝采せられたものである。瀧の川學園の石井君が之を反譯出版せられたのは、眞に時要に適中したものと思はれるが、何卒此等の書物に參考して、日曜學校に一進化を與えたいもので、又一般の教育者及び父母兄姉も之によつて大いに得られる所があらふと思はれる。

Du Bois' "The Point of Contact in Teaching".

兒童教育指針……東京瀧乃川學園出版

○貧困乃ち學境なり

言ふ莫れ、一室を掃除せざるもの安くんそ能く天下を掃蕩せんと。一家貧困のうち豈に天下の財政を料理すべき神器の養成に効なからん哉、人もし發憤せば、不善人は善人の資、此の貧を愛しますんば何を以て能く生かすと云ふとを得ん。固く惟ふ、方今の財政難を解決する能はざるものは、同もに時務を言ふに足らずと。而して、此の解決を爲さんと欲するに方つて徒らに自家の究乏に閉息せんとするは、何等の怯ぞ。大丈夫、當に自己疾病の中より起つて、一代施藥の刀を下すとを學ぶべき也。（鴨夢）

家庭

臺所ラボラトリー

女の境涯は實に詰りませんもので、年が年中、同じ様なヿ斗りを仕て居ねば成ませぬ。水を汲んで米を洗つて、御飯を焚て、澤庵を切る、御膳を出したり入たり、拭たり洗つたり、少しも變つたヿがありませぬ、水車が毎日〳〵同じ様に廻つて居てサゾ詰らぬヿであらふと思ひますが、夫でもアレはまた時には休むヿもありますし、夫に音をさせて勝手に大キナ聲をして歌をうたつて居ます、妾どもは臺所に居てさへ、聲一つ大きくするヿは出來ませぬ、座敷牢がつらいと申すものもありますが、臺所の生涯も一つは牢の様なもので御座り升す、折々は自分でお菜の心配をせず、食べてあとを片付ける心配もなく、人に給仕されて、人の料理したものを食べて見たいとも思ひ升が、夫もメッタには出來ません、たまに余所外に參りますれば、お客になつて、キチンと坐つて、四角四面に謹しんで居ねばなりませぬシ、夫に第一、帶が固くて、お腹がつまつて、樂に御馳走になるヿも出來ません」と。之が尋常の婦人の不平である。

女學生あがりの諸君なども、大抵似よつた不平があり升。初めは少し變つて居て、中々新らしい家政、新らしい料理法を試ろみんとせられます。お膳の代りにテーブル。燒肴を止めて、オムレツ、乃至、フライなどと云ふ工風もあり升が、夫も暫時で、中々万事思つた様になりませんから、新婚の味半年で失せ、女學校出の理想も、一年とは持たず、夫からは同一の世話女房で、同一の不平、あゝ〳〵女は詰らぬものだと云ふ歎聲を發するお方が隨分と少なくない様であり升。

要するに、臺所生涯は、單調子で、變化が無くて、器械的で、詩歌がない様に見えまして、婦人方が不平を起される筈だとは思はれる所もありますが、更に考へ直して見ると、夫はまだ其のお方の覺悟が足らぬので、決してや女學校にでも居つた人が、其様な屈托と不平とで了つて仕舞つては、大相ナ誤まりであると申さねばなりませぬ。

茲に一例を擧げて、其の誤まりを辨じませうに、諸君はかの

學術者の實驗室と云ふものを御覽ナスツタことがあります乎。其中で、まづ生物學者の例を用いて見ませうならば、或人は花や、木の芽や、草の葉の樣なものを極微かに切つて、之を顯微鏡に照らして、細胞の工合を調べて居ます。又或人は、腐つた水とか、藻屑とか、小さい虫の尻尾や頭の切れはしなどを同じく微かに刻んで、之を顯微鏡にかけて見ます。毎日々々同じことをして、一々其圖を取つて居ますが、果して夫が何の用に立つことやら。所謂ゆる人世の益になると云ふことに迄でこぎ着けるものもあれば、一生ソンナことも出來ず、たゞ實驗室內の記錄に丈けとゞめ、人にも知られず、世にも用いられず、何ンタル効力もなくて死ぬものもあり升。然し堂々たる學術者が毫も之を不平とせず、一生涯、毎年、毎日、同じことを爲て、少しも厭きませぬ。斯樣に忍耐して、斯樣に勉強した上句、數十年にして大發見をする人もあり、又後の代の人が受け嗣いで大發明をすることもある。而して、其の目的に達すれば、人世の大利益となるので、或ひは黴菌が發見せられるとか、注射法が發明せられるとか云ふ樣になれば、ソノ爲に人間の助かること何十万人だか知れぬほどであり升。斯樣にして、或人は、苔や茸の樣な花もない味もないものを一生涯調べた人もあり、又或人は蚯蚓のやうな、忌な、面白くもないものを四十年餘も研究したことがあり升。

左すれば、女學を知れる主婦諸君は、何故、其の臺所を一のラボラトリー（實驗室）として、家政庖厨の仕事を一の研究とする心持にはなられませぬ乎。同じ樣なことを爲るのが面白くないと言われますならば、學術者先生の毎日毎日仕て居られることも同樣です。部屋が狹く、變化が無いと言われますならば、之と同じことです。大發見と云ふことが容易には無いと言われますならば、之も亦た同じことです。獨り學術者先生が、辛棒し、忍耐し、一生同じことを爲て少しも不平を言われぬにも係らず、女子たる諸君が之を面白くないと歎たれるならば、夫は面白くないのではない、面白く感ずることが出來ぬので、つまり無學な爲であります。

日本で山林の事を尤も早く主張して功績を擧たのは、熊澤蕃山で、第一回山林共進會の節、金牌を贈られた程であり升。木の無い山に木を生やし、木の切り方、調え方などに注意して、大に木の經濟を計つたと云ふことで、山林學上の功績とし

ます。今でも、山林學は實に大切な學問であります。然るに、もと竈に用ゆる薪木の經濟法を考へ、飯が眞木五本で焚けたものを三本で濟すとの出來るやうに工夫したならば、一ヶ月で六十本、一年で七百本餘の儉約であります。もし一軒で此の通りにして、全國一千万戶で皆な其法に據るやうにならば大相の違いで、即はち山の木を切る量を減らしたのだから、山に木を育てることを殖したのと同じとで、言ひ換ゆれば、臺所に於ける薪木の使用方に改良を工夫するとと、林學上に於ける功績を舉るとと同じ結果を生ずるのである。

すべて此の譯で、飯米の用い方、料理の衞生等に於て發明する所あらば、其結果は、農學や、醫學や、衞生學上に於ける手柄を奏すると同じとであります。左すれば、ハウスホールド、サイエンス（家政學）と云ふ一の科學を組織し、發明するとに苦心して、其の學理上の研究を臺所に於て施こすと云ふ心持になり、臺所をもつて此の科學のラボラトリーにすると云ふ覺悟になつたならば、婦人方の庖厨に於ける趣味、抱負は一變するとであらうと思ひます。之は是非、女學生上りの主婦諸君が責として任ぜられねば成ぬ所であり升。

評論

基督教の悟道

日本の基督教は申さば青年で、何んと言つても、まだ若いと評せられるとを免かれないのである。其の傳道者も若いが、傳道法も若い、傳道の届き方も至つて若くて、惣べて何處にも苔のついた、サビの出來た樣な趣きが無いのである。何事も、青年！青年！で、之が即はち善い所であると自から得意になる若者もある。無論其の意味がないのでもない。然し、たゞ得意にばかしなつて居ては間違ひの種である。

第一、甚はだ遺憾に思ふとは、傳道法の一樣一色なとである。機關の單純なのが進化の幼稚な證據とすれば、此の傳道法などは極めて幼稚なものである。而かも、此の幼稚らしき一轍一扁の傳道法から少し違つたとをするものがあれば、直ちに福音的でないと云ふ宣告を下す。何が、「福音的」かと問へば、たゞ漠然たるもので、ツマリ某々の信仰箇條めきたるものを

掲げさへすれば夫で善いのである。穿鑿も實に無雜作極まるものである。

中には又、宗教と何々との關係などと云ふ問題を出し、之が解釋を餘程六かしきことの樣に言ふ人もあり。又、宗教は是非政治と結ばねば迚も廣くは行われぬと、今更の發明の如く言ふ人もあれば、之に正反對をして、純粹福音の傳道には、總べてソンナ迂路は入らぬと云ふ人もある。吾人には一向面白くも何んともない陳腐な議論である。

凡そ、宗教に尊とぶ所は生命ではない乎。何等の心術にも悉な生命を尊とぶこと無論であるが、宗教就中、基督の宗教に於ては、主として屡ば此の「生命」と云ふことが說かれて居るのである。既に生命となれば、如何なる人間の仕事、働らきにも關係すべき筈で、又其仕事、働らきの生命とならねばならぬと言ふ迄もなからふ。今更、何々との關係など、疑問して、其關係のありや無しやを考がへるとなどは入らぬ筈である。學術にせよ、商賣にせよ、政治にせよ、すべて此の生命が徹せねばならぬ。生命が徹せぬほどならば、即はち活きた宗教になつて居らぬのである。

此處に至つて、吾人が殘念に堪へぬことに思ふ一事がある。即わち基督敎の生命が各種各方面の機關に徹すると、乏しく、若く、新らしくして、まだ〳〵中々佛敎などに及ばぬと云ふことである。

其證據には、先づ試ろみに日本在來のいろ〳〵の藝術を調べて見るが宜しい。すべて極意秘傳と云ふ所ろに至つて見れば皆な宗敎で、夫が大抵、禪である。凡そ何事によらず、極意とする所に至れば、言語道斷のもので、之を口にすれば既に早や形式となるのである。然し、口にして言わざれば亦た傳はらざるが故に、不立文字、以心傳心と云ふ中にも、そう言ふ心はすでに多少の言葉にせねばならぬ。コノきわどい、微妙な要點が即はち生命であるから、是非、心の生命を第一とする宗敎に依つて此の心持を傳へねば成らぬ所ろから、すべて藝術の極意には皆な宗敎の悟りが凝つて居るのである、

うつるとは月も思はずうつすとは水も思はぬ廣澤の池

不離不着、蜻蛉水に點ずるの工合などが即はち其の一例で、劔にも、馬にも、茶の湯にも、禮道にも、皆な肝要とするが、扨て其敎の主旨は矢張り禪と一致して、禪を以て說いて

あるのである。之れ、禪の生命がかゝるいろ〳〵の藝術に這入つて居るので、申さば、禪の傳道がかゝる諸機關、諸藝道の奥に迄て徹して居ると云ふのである。

然るに、日本の基督教に於て、此般の消息を說いたものがある乎。又說かんとするものがある乎。啻に極めて乏しいのみならず、斯樣なことを言へば、何か佛教的であるかの如くに言ひ倣す樣で、眞に此類の趣味は稀有の姿である。

左らば、外國では何如である乎と言ふに、流石に、其教の舊國だけあつて、宛から佛教が我國各種の機關藝術の根柢に浸潤せる如くに、彼國のあらゆる方面、あらゆる人事に行渉り、すべての生命、すべての悟道となつて居る。眞とに左もあるべきことで、左なくんば其宗教は砂の上に植てられたるもの根もなく生氣もなきものと言はねばならぬ。

此序でに、西洋人が宗教的の金言とするもの、眞意を辨じて置ねばならぬ。アレハ、其人其人の一生の悟りの如きものを言つたもので、極めて貴重なものである。其人が色々に苦辛經驗したるのち、ヤット其信仰と一致して、生命となり、以つて後人の教えに言のこした悟りの一語で、中々をろそかには聞くべきものではない。もし例の卷物の末か。虎の卷の秘傳書にでも書いてあつて、先以て實行に多年工夫せしめ、やうやく揣摩し得たりと思ふ頃に初めて出して示したらば、ハッと氣が附いて其意味も亦た活動して心に覺らるゝことであらふが、何分公然の秘密で、何人にも自由に語り傳へ、而も六號八號の活字に植られて、澤山そふに人の目に觸れるやうになつた以來、誰も之を宗教上の一種の悟道と思はぬので、甚はだ勿躰ないことである。

例へば、フレーベル一代の教育上の悟りは「教育は人の中の神を引出すにあり」と云ふ一句に存するとして見るに、此一句は、耳に聞き口に傳ふるには、簡短極まる語ばであるか、扨々、フレーベルなればこそ此の悟りが得られたので、此の悟りを得て、其教育の生命とする迄には、何程の苦辛を爲たか、眞に思ひやられるのである。すべて西洋人の宗教上の金言なるものは、かゝる意味に於て、其悟道となつて居ると云ふことに注目せねばならぬ。

扨て、西洋に於ても、日本に於ても、宗教が斯迄にあらゆる人事の根柢に浸潤してこそ、初めて其の宗教に根柢ありと申

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

すとが出來るのである。左すれば、凡そ人事を深く極はめ、人間の爲すべき仕事を眞面目に土台迄で詮じつめるときは、是非、宗教的になるものである。而して、其の宗教的になると同時に、先輩たり傳道者たる人が早く既に其消息を驗知して、宗教と心構えとの調和を遂げ、之を生命として、悟りとして、吾に活氣を與へくれる救ひの存するを見る時は、苦心の餘、此の光、此の力にたよりて我も亦た其の悟り、其生命を得ると云ふ次第に立至り、即はち宗教が吾心の奥底に徹するものである。

斯ありてこそ、宗教があらゆる藝術の極意に調和し、此の極意を工夫せんとするものゝ惣べての心に入り込みて、之が心の主座を占めるのである。

左れば、日本の基督教にして、かゝる方面に於てかの禪に代るほどの勢力を得んと欲せば、乃はち亦たあらゆる藝術の極意に基督教の信仰を調和同化せしめねばならぬ。斯る趣味に於ての一種の傳道が無ければならぬ。

此に至つて、傳道上、罪の救ひを爲すと云ふ、其罪なる觀念が、從來よりも一層擴張せねばならぬ。煩悶を救ひ、慰藉を與へると云ふ、其の救ひ方慰さめ方が、從來よりも一段雅致あるものとならねばならぬ。

夫は如何なる者である乎と云ふに、啻に世俗に所謂ゆる罪を犯したとの悔改めのみでなく、又、神聖をけがしたりと感ずる殊勝の觀念斗りでなく、吾が成す事業が吾思ふ通りに出來ず、吾が修練する四肢五躰が吾思ふ樣にならず、所謂ゆる、藝に凝り、術に凝り、修業に凝り、道に凝りたるもの、若くは、不動心の得られざる、臆病の去らざる、大勇の出でざる等を歎くものなどが、心中の一種の罪即はち曇りを去つて光明々の大悟を得んとするの工夫修業を爲す途中の大煩悶、大改悔に對して救ひと慰藉とを與へるの傳道がなければ成らぬと云ふのである。

此の傳道を爲すものは、余程修業の積んだものでなければ出來ぬ。たとひ、其伎は出來ぬとも、伎を通り越して、伎の生命となる所ろのものを確かと自得して居らねばならぬ。喩えば、柳生但馬に劍道を傳へ、利休に茶道を傳え、左甚五郎に彫刻の神を傳ふる所の夫々の僧侶の如き工合でなければならぬのである。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

扨て、斯樣な風にして傳へれば、其の一道の達人が、自己の伎の神髓を徒弟に傳ふるとき、皆な自己が依つて以て發明開悟したる宗教上の金言を本尊として後に讓るからして、宗教が其の方面のあらゆる末派末流に至る迄でに及ぶのである。

宗教も斯樣にならねば決して天下を制するとが出來ぬ。

顧りみて、日本の基督教界を見れば、まだ〳〵青年である、決して氣をゆるし、大きな顏をして、得意になつては成らぬ。

而して、爲すべき仕事が多くある耳ならず、傳道の門戸は到る處ろに開かれてある、即ち其人を要するとして開かれてあるのである。

有美の中發見

○有美……ハガキ日記（四）（十三日濱松にて）

又々發見あり然し是れは卄削假位のものにて一昨日三保の松原に天の羽衣を見しが之れは白きものなるべしと思ひの外眞黑のものにて黑に染めたる獸毛なりと認定せり依て思ふに外人外套の斷片なるなるべし一昨夜は久能寺の舊跡なる鐵舟禪寺に宿し行基菩薩の作なる千手觀音を開帳して拜す是れは住職一代に一度よりせぬものなりしと　此の處に藥師像の非常なるものあり雨ザラシにせられたれど僕もし金があらば寫眞師を伴ひ行きて寫させたし。文福茶釜を見しが是れは毛が生へたものに非ずして足利義政俳名文福より宗長といふ連歌の宗匠へ給はりたるものなり、化けたのは館林にある由なるが見れば狸坊主とでも仇名せられし惡僧ありて家光公より下賜せられたる文武久茶釜を他に典貸し之を盜はんため何處よりか狸一疋ツレ來り之れに化たとでも言ひふらせしものならんと認定せり。昨日は久能山にも廻り滿身汗にて眼がピリ〳〵し尻がすれてそれに汗が入り痛きこと夥し。昨夜靜岡にて一汽車遲れし故其間に芝居を見しが、美人あるなし一人もあるなし。その拔の繪畫的なるにも驚けり。此處に宿せしは深夜二時今夜は名古屋に入るべし、

講壇

夏休前最後の説教

約翰傳第五章に云く、エルサレムの羊門の邊に、ヘブルの方言にてベテスダと云ふ池あり。此池に五の廊あり。其中に病める者、盲人、跛者、また衰弱せるものなど多く臥し居て、水の動くを待てり。そは天の使時々池に下りて水を動かすとあり、水の動けるのち先だちて池に入しものは、何の病によらず愈えり。三十八年病たる者一人かしこにあり。耶蘇、彼が臥居るを見て其病の久きを知り、之に曰ひけるは、愈んとを願ふや。病者答へけるは、主よ、水の動ける時、我を扶けて池に入る人なし、我入らんとする時は他の人降りて我より先に入る。耶蘇、彼に曰けるは、起よ床を取上て行け。其人即刻に愈え、乃ち床を取收めて行めり。

此の池は一種の間湧泉と見える。時々新らしき礦泉が池の眞

中より湧き出で丶大に水を動かす時、迅速に飛込みて其の新鮮なる礦泉に身を觸る丶時は幾分の効力あつたものと見える。左れば、此の効驗を信仰によつて彌よ大きくし、樣々に言ひ傳えたる爲め、若し水の動く時即はち泉の湧く時に入浴したるにあらざれば最早キヽメもないものと信じて居たものと見える。此の水の動くを解釋して、天の使が時々池に下るのであると思つたは、一の詩歌で寧ろ美な信仰である。今日の地質學者が細密なる解釋を下しても其結局は遂に分らぬ、最後は之を一の理學的勢力の致す所ろと言ひ做すの外はないのであるが、此の理學的勢力の爲に下より湧き上ると云ふのも、天の使が上より舞ひ下ると云ふのも丶第一原理の明白に分らぬとは殆んど同一で、むしろ、之を天使の動かすのであると言つたる方が、勢力を麗わしく說き去つたものと思はれて、吾輩は賞味して讀んで居るのであり升。

扨て、本文の記事を簡短に申して見れば、茲に三十八年も病みたるものがありまして、此の池の水の動く時に飛込たいと思つて始終窺がつて居ましたが、何分身躰不自由にして少しも思ふやうになりませぬ、ソレと言つて飛込まふとする時には、五の廓に滿ち充ちた外の病人達が早やザムブ／＼と飛込んで一寸の餘地もありません。何方かどふぞ入れて下さいませんかと泣き叫んで賴んでも、聞いて吳れるものもありません。勿論夫々附添人もあるのですが、此病人などは貧乏で甲斐所がなくて誰も世話をして吳れるものもない。錢を出して世話を賴むものもあるのだが、此病人は夫も出來ぬ。大キナ聲をして賴めば賴むほど、皆な嘲笑つて馬鹿にして居るのである。而して、一時動いた水がや丶沈まつて、上つて來て躰を拭ふ族などは、樣々に効驗を吹聽し、果して病が癒えて段々に歸りゆくものもある。其欣々として家に歸る人、又續々として次から次に出て來る人、日夕絕えざる中に、誰一人此の三十八年の病人を顧りみて吳れるものはない、多年幾年か此の廓下に伏して居ても、聲をかけて問ふてくれるものも無い。池はベテスダ即はち慈悲の家と號けたる所であるが、凡そ慈悲と名の附く所ろに於ける無慈悲ほど慘酷なとは無いのであり升。基督之を見そなはし、愍憫の情に堪えず、其の顏其の樣姿を見て如何にも忍びがたく、

汝は病癒んことを切願するならん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と曰はれたる、其語に涙しめり、聲ふるひて、御情けは滿面に露はれたのであり升。病人は、此の氣高き慰さめ手に對してでも滿腹の不平を述ねばなりませぬ。此人に不平があるのではありませぬが、不平を聞いて呉れる人が無いときには、尤とも心切な、我の惟一の慰さめ手に對してでも怒るの外は無いのであり升。彼は憤ほつたる、然しながら可愛想なる聲をもつて答へました。

先生お聞き下さい、水の動く時に入らんとすれば既に皆の衆が先んじて入り、一人すら 私 を扶けて入れて下さる人はありません

此に至つては、最早多言を以て慰さめるとも出來ぬ、其の不平なる不愍なる容たを見、其のやるせなく、甲斐所なき、いぢらしき狀態を見ては、吾主たゞ一言せらるるの外はないので、直ちに仰せられた、

起よ、床を取上げて行け

其の壯嚴なる御聲、其の氣高き權威、其の万事を支配せらるる確信力によつて、一喝、起つて行けよと申されたる一言の勢ひに激せられ、意はず起ち上れば則はち病は癒え、腰は立つたのであり升。

之はたゞ記事の大躰を申したのであり升が、之に就いて思ひ起すは、夏休中、所々に行わるる海水浴もしくは温泉場の事で、則はち諸君が之より征いて或ひは行樂せんとせらるる所の遊である。

屢ば申す如く、夏休は決して休ではない、敎室内の學科を休めて、敎場外の實學に就くの時で、則はち、旅行に、探撿に、視察に出かける時であります。然し、中には、父兄に連られて温泉に又海水浴などに出かけらるる仁もあり升うが、先づ此の温泉海水浴などに對する觀念ほど近代に至つて變化したものは少ないのであり升。元は、温泉場と云へば、たゞ病人や半病人など斗りが行つたものです、今の樣に、遊びを主意として行つたものは至つて稀なのであり升。況んや、海水浴などは、大磯で松本順氏が主張せられた以來の事で、極く近頃の事である。考へて見れば實は可笑なもので、女が如何がはしい風附をして海に這入り、又ぬれ鼠の樣になつて陸に上り、ビショ〱と水をたらし乍ら、膚の見えすくをも構はず平氣でシヤベリ乍ら遊んで居る所などは、決して美術的

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ではないのであり升。夫のみか、海水浴場にゆけば、全地皆じだらく公許で、女が細帯をして、大キナ臀をゆるげ、頭に大した帽子などを結びつけて、家鴨が行列する様に歩るいてゆく光景などは、決して美くしいとは思はれぬのであり升。然し此等は尙別事といたし、彼等は眞に養生の爲にのみ行くのではありません。大抵は一種の見榮の爲です。「此夏、何處かにお出ですか、「ハイ大磯にとか、伊香保にとか言はねば、何となく貧乏くさくて、當世風のすべきことを爲ぬ樣に見えるものと見えて、只一圖に夏は出かけるものと心得て居り升。日本位ひ結構な國に居乍ら、避暑などとは驚ろくべきなまけもので、凡そ病人にあらざる限り、暑は避けるものでない、いよ／＼暑に當つて躰を丈夫にするが善いのであり升。然し乍ら全躰が箇樣な勢ひで、人々先きを競つて避暑に出掛け、海水浴の水の動くとき、我さきに飛込んと切りと騷き廻る連中の多くあるを見るにつけ、余はかの貧しき娘、不自由なる女學生などが、斯る仲間に入ることも出來ず、人の多く出掛る時に室內にふすぶり、たゞ一葉の團扇に辛ふじて夏を過す爲躰などを見まして、心に泣くことが多くあります。彼等を扶けて水に入らせる人もありません。其の心の微かなる願を聞く人もありません。多年、羨んで、恨んで、獨り歎じ心根に同情を寄せる人もありません。世は實に情けないもの、人は眞とに我身勝手なものであります。

左れば、諸君の中、幸にして父兄の恩澤に預かり、結構なる避暑海水浴などの遊樂をせらるゝことあらば、諸君の外には多年、水に入らんとして入り得ざる不憫の人の多くあることを心に承知し、我身の忝けなきことを感謝すると同時に、決して心得なき誇りを示し、覺悟なき奢りを見せなどしてはなりませぬ。かの高樓に倚つて我居室の廣きを誇り、歸つて遊山ばなしを得意として我が富を人に示すなど、心得なき女子にありがちの事で、眞とに見下げ果てた所存であります。もし諸君ひとり遊びに出掛けたらば、ゆけぬ人に對して、慰さめの手紙にても、心をこめた土產でも送りなさい。遊ぶ中にも決して放心せず、其邊の貝や、花や、草をあつめ、又は名所舊跡を尋ね、歷史上の研究を爲し、村婦村娘と話をして人情風俗を硏究するやうになさい。海に入つて心を黑くし、溫泉に行つて心得方を弱くするやうでは決して健康ではありませぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雑録

自轉車武道

鴨夢

那珂通世君が一千二百里の輪遊は近時の爽快である、假令ひ小ツポケナ島國で、蟻が競走する程な運動に過ぬとしても、先以て比較的の壯擧と致さねばならぬ。況してや、到る處ろの輪友が送り迎への斯く迄に行き渡を見れば、自轉車の流行は全國仲々盛んなものと見える。吾輩不肖と雖ども、唯此一つの道にかけては先輩である。少なくとも、那珂君などよりは餘程の先輩である。安田善二郎氏が明治十四年に率先して乘試ろみ、庭の燈籠や手水鉢を押し倒し、更にをばあさんを引倒して殘念乍ら中止されたと云ふほどには早くは無いが、植村君が大禮服を着た軍人の後ろから乘かけて、其の濶歩する股の間へ前輪を突入れ虚空に軍人先生をはね上げた伎倆に比べれば、少しは出來るのである。既に明治廿六年の比『自轉車上の小觀察』と題して左の如き一文章を公けにしたともわる。（此道一つは當世風に自ら證し、自から推薦する型に則とり、大いに吹くつもりである）。

（一）道を行くは山に登るが如し一段高ければ一段の景あり、車を引くものと車に乘るものと其見る所の景異なり、車に乘るものと歩むものと亦其觀る所の景異なる、況んや歩むものと一鞭叱咤して馬車を驅らしむるものとをや、吾自轉車に乘り地より高きこと僅に三尺而して觀景全く異なる此に於てか馬車に乘りたる人が兎角歩行人を馬鹿の如く下賤人の如くに思ひ做す由來を覺りぬ、西洋人に歩むもの多きこそ幸なれ、大臣諸君若し馬車を廢すれば一段の新景を識ところとあらん。

（二）店を飾る人は歩行人の注視を標準として飾るなり、故に一段高き所より看下すれば亂雑不調子がちにして露はる、喩えば手品使を二階より覽るが如きか、のり付の秘訣容易に曝露せらるゝ也、故に市區改正などにて道幅急に變じ通行人の種類俄に變る時は店頭の裝飾も亦一變せさる可らす、左なくとも車上の人を目あてにするものは亦其心あるべし、人を見る亦如此し其飾の色によりて其飾の目的を知る。

（三）上より眺むれば實にも怜け者の多き哉、店にて欠伸する人途上にてうろつく人見物する人總べて是れ不生産的の人なり、大砲を放ちたしと思ふと幾度ぞ。

（四）道を歩むに身飾のみ敏活にして尤とも多くぶら〳〵するもの植木職なり、早朝の出掛にすら既に然り、なまけものの骨頂は植木職なる可し、社會問題は此等より初まる。

（五）偶然行あたりた轉左向、右轉右反、兎角同じき方に數ば避けて危ふく衝突せんとする事度々あるものなり。此時身を沈めて一躍巧みに甘まく避くる人は第一兵卒なり、第二官公立學校の生徒なり、極めて危ふきは老婆と田舍もの也、老いたる武士風の人は數間さきより既にさけて嘗て氣遣ふ事を要せす。

（六）子供を呼ふ者は之を驚かすまじきものなり、道の右側に母あり左側に子供あらんとき子供を避けんとてわざと右側の方に近く車を行らんに母大聲にて

子供に心付け、危なし〳〵など言はん時に子供はわざ〳〵右側の方に走せ來りて殊更、車にすら衝當ることあるものなり。

（七）自轉車の習ひ初めは乘馬の稽古を初むる時に似たり、車は兎角道側にうねり行き屏壁などに乘手を磨りつけるものなり。稍や慣るれば亦馬の如し宛がら生物の如く可愛きもの也。

（八）修練は實行によりて得へし、乘り方の百度の講釋は實地の試乘の十回に劣る、初めより余り多くを望まず先づ乘るべし、暫らくして坂を下る事を得、又暫らくして坂を上ることを得、又又暫らくして兩手を離すことを得、更に又暫らくして車上車下人なきなど言ふ愉快を感じ初むべし。

當時は自轉車に乘るものも至つて少數であつたが、其后次第に增加し、商家の小僧などが速りに乘廻るやうになつた。之は商人が經濟を考がえたので、兎角道草を食つて遊びたがる小僧なども、自轉車に乘つては、早く驅けるのが遊びだから、忽まちの間に歸つて來る、用事が甚だ速やかに辨ずると云ふので、大通りなどは、軒なみに自轉車を備えるやうになつた。夫で小僧等の得意は他に比すべきものがない程である。之計りは主人の許しで、公々然天下を乘廻はす、其意氣揚々として車上から眼下に見下す見識は素張らしいものである。然し、彼等が乘出してから吾輩は急に自轉車がイヤになつた。小僧が肩を猫の樣、頭を龜の子の樣に、車上に匍匐やふにして乘て居る樣を見たり、又中には生意氣らしく兩手をはな

し、わざと巻烟草を吸つてゆく小面の惡い所を見たり、或は又小僧ではないが、ハイカラ連中が妙に身輕に出たち、車上で手ばなしの、わざとハンケチで口の邊りを撫でるキザな樣子などを見てからは、非常に自轉車が嫌ひになつた。

然し、自轉車は余程經濟なもので、又愉快なものであるとは決して忘れなかつたが、此の二つの必要が我を促がすと同時に、急に最良の自轉車一輛を手に入れることになつてから、扨て彌よ之を再たびしやうか否やと云ふ大問題に逢着した。

大分尻も重くなり、何んだか、イヤに大人風になつても居て、兎角氣が進まなかつたが、遂に一種新奇の思想を忽然として感覺し、妙に一道の光を得た樣な心地がして、左てこそ自轉車を再たび用いて見やうかと云ふ氣になつた。

夫を何事かと云ふと、自分には餘程の大發見で、恐らくは亦自轉車の價値を大いに高くするであらふと深く確信する所のものであるが、然し言つて見ればたゞ一言で盡きる。言つて仕舞ふのは惜しい樣だ。左れど、是非に及はん。言ふは。乃はち、『自轉車武道』と申すとである。

此の武道と云ふ心掛で、而して此の武道の鍛練をかねると云

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ふ心持になつて來て、初めて、小僧や、ハイカラなどが乘るものに中間入しても構はぬと云ふ丈けの安心が出來、やうやく眞心に力を得た。

自轉車武道と云へば何だ。まだ何の型もなければ、そもく ソンナ武道があるものか無いものかも知らぬ。然し、是非、武道になる筈で、又爲たいものだと云ふ丈けは、自分で固くきめて居る。

其大要を言へば、たゞ「早く走る」とか「巧みに見せる」とか云ふやうな浮いた考を悉とく止めて、突然、横から突かれても決して落ちぬとか、落つる時でも身を拾ふ餘裕はいつも遺して置くとか、衝突せぬとは勿論であるが、衝突しても急に車をかはすとか云ふ樣な工夫から初めて、遂には身車一致、彼我一躰の妙域に達し、鞍上人なく鞍下馬なしと云ふ程な修練を得て、車の上で、敵と仕合ふ位に至りたい、其の稽古としては、追々、自轉車打球、自轉車撃劍などを初める樣にしたいと云ふのである。

夫故、見榮のり、曲乘りなどを第一禁物として、武士が馬に乘る御術、御道を學ぶやうな風にしたいと、先づ六かしく言へば言ふのである。

然し斯樣に言つて見れば、中々六かしい。其心得でやつて見ると、思ふやうにならぬとも亦夥たゞしいものである。どうして、身車一致どころか、吾腕吾足さへ、少しも吾が思ふやうにはならぬのである。左れど、此心掛を持つと持たぬとは、大した違ひだから、妙な輪友も亦大いに殖えるやうにありたいと、切に祈つて居るのである。

氷冷々（其四）

青柳有美

想餘集改題…………

三伏の炎暑、また仲々に凌ぎ難ければ『想餘集』と氣張りめさるも、餘りに熱くるしかるべしと、かくは改題しつ。我が筆よく氷に似たりといふ刄の如く、讀む人の心膽を寒からしむるを得るや否や。

○貞婦兩夫に見えずといふは、これまで亭主に蓄ひ養はれたる身の、些か謝恩の徴を献げんとてなり。猶ほ殿樣に飼ひ殺されし武士の、忠臣二君に仕へずといふが如し。共に、衣食住を賜はりたる御禮奉納なり。

●古への封建臣民は曰く『君主にして若し我れを保護し、我れに俸祿を賜ふに非ずんば、これに忠節を盡すの義務なし』と。今の女房たちは曰く『男にして若し能く我れを助け、豐に衣食せしむるを得るに非ずんば、これに貞操を守りて其妻たりといふを恥づ』と。

●繪畫は、其舞臺を一平面に限る。故に彫刻の如く深かるを得ず。されど、その廣きに渡るを得ること、到底彫刻の及ぶ所に非ず。

●希臘人は、復雜なる思想を一系統の間に綜合せんことを力めたり。故に、其審美感は凝結して彫刻となれり。以太利人は然らず、單一なる思想をも、なほ賑に見せびらかさんことを好めり。是に於てか、繪畫の發達を見るに至れり。

●冷酷なる男子の心を柔げんと思はゞ、決してこれに强く當るべからず。何事もしとやかに持ちかけ行きて、自ら其の餘りにつれなきを思ひめぐらすに至らしむべし。

●女は、素より外邊だけのことなれども、至りて引ッ込み根性のもの故、男子にしてもし自ら戀の心を動かせしが如きことあらば、何の恥も見えも厭ふに及ばず、短兵急なる突貫を試るべし。つまらぬ愼しみに女方の天氣のみ窺ひ居らば、いぢらしきまで、はかどらぬものぞ。戀のことにて、男の女に關はれる時には、まづ鐵面皮の程なるがよし。

●容易に世の評判に上らぬ如き人の名譽は、又容易に消え失せゆくものに非ず。不思議に永續きのするものぞかし。

●婦人の戀愛は、其根柢を、實用の上に置く。故に、動物的にして審美的分子を欠く。されど、男子の戀愛は、其根柢を空想の上に置く。故に人間的にして詩歌的分子あり。

●苦痛に同情するは、是れ人間の尙ほなし得るところなれども、快樂に同情するは、是れ天使に非ずんばなし能はざるところなり。

●希臘以來、既に數千年。世間、哲學者なるもの、濱の眞砂の如くにそれ多く、殊に獨逸近世の命名（ノーメンクレーチユア）哲學に於て、所謂學者なるものを出すこと甚だ夥しと雖ども、遂にプレトーかアリストートルか、將又兩派の折衷かを出でず。たゞ其異るところは、祖述の方式にあるのみ。ハートマンの如き、極言すれば、即ちこの折衷派に屬するものなり。しかも、之を稱して神來の大哲學の如くにいふ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

こと、誠に沙汰の限りならずや。

●されど、プレートーとアリストートルとの以外に逸出せしもの、却て夫れ英國派の學士家に多きか。獨逸の學者にして、このノーメンクレーチュア哲學の弊を脱せしもの、たゞショウペンハウエルに於て之を見る。然れども、彼れも又遂にプレトーの流れを汲むものなり。

●帝國哲學者の、多く輕浮淺薄なるは、歐洲の學者の如く、希臘語の智識あることなく、隨て近世歐洲學術の源泉たるプレトーとアリストートルと、この兩者を抱容せるソクラテスとの大精神に、直接契合すること能はずして、徒に、末世末法の代に生れたる獨逸學者に隨喜するが故なり。

●されば、今の大學生をしても、希臘語を學ばしむること毎週十六時間ならしめば、日本は茲に始めて稍々眞面目なる學者を得べし。嗚呼、希臘語は遂に死語に非ず。宜なる哉、歐米諸大學の、之を以て學課の主腦となすことや。

●現世界に行はるゝ奢侈の十分之一は、他人の評判を氣にするより起るものぞと、例のショウペンハウエル言へり。

●世の中にて、最も見ともなきは、堂々たる男子の、啜り泣きする聲なり。

●スパルタ人は、武士道の修行と共に、又能く踊の修行をなせり。我が邦に行はるゝ劍舞の如き、これを振付師の手にかけて、一段の文を加へなば、國人の座作風態を麗美ならしめて、しかも士氣を沮喪せしむることなきを得べし。

●先んずれば人を制すとは、是れ種痘及各種血清療法の原理なり。

●すでに士官學校あり、又商工學校あり、豈に藝人學校なきの理あらんや。

●佛國革命も、その起因は國庫疲弊して、重税を下民に課せしあり。我邦の御一新また然り。獨立戰爭、南北戰爭、これ又經濟上の利害より起れるに非ずや。故に、革命の源は凡て之を經濟問題に發す。侃々たる大義明分と權利論とは、これ其醜を飾らんとする謀士一時の權道のみ。

●受けたるものは出さゞるべからず、藝者と女郎とは、餘りに多く人の愛を受けて、しかも又これを其持主に返へすほどの情熱を燃し難し。是に於てか、私なる男を作りて、これに炎々たる愛を送る。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●威嚴は嘆賞を買ひ、嘆賞は女子の心に戀の實を結ばしむ。士官の軍服は嚴めしく、そのサーベルと眞鍮釦とは光るものなり。故に、をんな子らの嘆賞を買ふ。故に士官は娘らに戀せらるゝものなり。

●牛は牛づれ、馬は馬づれ。

●コムピドークルス以爲らく、萬有に貫通する二大法則あり。一を『愛』といひ一を『嫉』といふと。これ求心力と遠心力となり。是れ善神と惡魔となり。遠心力の亡ぶるは、求心力の亡ぶる時なり。『嫉み』の亡ぶるは、『愛』の亡ぶる時なり。惡魔の亡ぶるは、善神の亡ぶる時なり。

●シムフオニーの美は、多種多數の管音絃聲を調和して、これを亂れ反かしめざる人智の妙巧にあり。

●男の戀するや、例へば、女人を抱ひて高き梯子の階段を上るが如し。その初めなよやかなる兩の手を我が首筋に搦みつけられ、其優しき胸のうちより送り出す香はしき呼氣に恍惚とし、些かの痛苦をも覺えず愉快に足運ばせ行けど、しばしのうちには、その女の餘りに我を手便りてもたれ來るより、その身の圍を飾らんとて纏ひ居れる種々の粧飾品のイガモガせるものなどにて、其所此所を刺し壓へらるゝが如き心地し稍々苦み出し、遂には其の仲々に重くして運びのぼることの容易ならぬにわぐみ、我が手に抱き居るものゝ窈窕たる佳美人たるをも忘れて、恰も普通なる荷物の如くに思ひなし、これを戀の口より投げ捨てんとするなり。（まだくある）

續海舟餘波

○兩陛下還幸御延引

○兩陛下、西京より還御の延引遊ばさるるは、何か譯のあることでありませう乎。

●お附のものは皆な歸りたがつて居るさうな。然し兩陛下は、東京で譯も分らぬ上に面倒計りかけられるから、西京の方がお宜しひだらふよ。お附のものは、手當と云つて多くなし、東京の方が住居が好いから歸りたいのだらふ。少しお附を更へでもしたら善からうよ。

○頼朝以來、府を鎌倉に開いても、帝室を其處にお迎へしなかつたは、どふ云ふ譯でせうか。

●別に必要が無いからサ。入りはしないよ。

○今の兩陛下も、少し長く西京にお留まりの方がお宜い樣に思はれます。

●お留守でも、誰も何とも言はないよふだ。然し、キメルと惡るいから、マア段々にして、西京にお出が善いと思つて居る。御喪中ではあるシ、今年一パイ位は、お出かも知れぬ。

○たれか、申上だのかと思ひ升が、どふでせう。

●誰も申上るものは無らふよ。皆なお附は歸りたがつて居る相ナ。△△も來てソウダと言つた。

●武家の時でも、帝室と一處になると、面倒な手數ばかりで西京の樣になるからナー。

●陛下でも、お分りになれば、お嫌だらふヨ。惡るい事と云ふと、皆なおかぶせ申すのだ。そして逃げて仕舞ふのだ。

●公卿でも、初は、西京へ行くのを悦んで居つたものもあるが、今では嫌がるよ。其の仲間で食えないものが、ドチラに居て、之にねだるからネ。（明治卅年七月七日）

寄書

初戀

在米紐育　野上無處庵

他人の視る目では、狂だ愚だと批判するが、狂愚となる迄も常識を失ふほど戀愛の情なく、今日は此方の岸に、明日は彼方の磯による濱千鳥では、鳥や獸の理想と區別される所はなくなるだらう。先祖傳來の遺傳、生存上の境遇、教育上の制裁で、外面上大に區別を有する樣であるが、心理的解剖を致したら、愛と云ふ點は同一でなければならん。合理的に考れは、此の常識を失ふ程の戀愛は人類の特長で、天眞爛熳たる初戀は財產的戀愛、權門的戀愛、命令的戀愛、床間的戀愛に優る。何である。人類と云ふ眼から見たときは、男女として何處に區別が在るか。それに兎角人間は他人の自由を無視する權を有して、眞正なる他人の戀愛を束縛し、權威が具備せないから御止めなさい、と成人らしく諫言するのが俗人の常であるが、戀愛は別物で、權威等云ふ可樂は、人類の權利を區別する戀鉢の形容だから、具眼者の斥くる所である。

初戀は人類の眞髓で在るが、俗物漢を以て集合する世の中だから、種々なる境遇の制裁に束縛されて、眞正なる戀愛も浮雲の爲めに掩はれるのが常數だから、之れに鞭撻を加へるのは識者の責任と思ふ。人類は確信ある主義に由て生存せんとする者なく、生存して居るから主義を立れはならん者として、ロクデモなき浮萍同一の見識を有する誤謬見の算法から割り出すから、天眞爛熳たる眞正の初戀も、烏渡淋數床の間の幽思と戀に易き世の習とは、鳥獸と何處に區別が在るかは、見識なき輩には解釋は出來まい。初戀は眞正なる戀愛で在るから、絶對の戀愛なきときは、一方をして戀愛の通はざるを知らしむるのも在情て、下らぬ調和等はどうしても、永遠の調和てないから、所謂淚を流て馬謖を斬るのが、眞に人類を愛する者だ、已れを愛するごとく他人を愛せし實行者である。月將に明んとして、浮雲之れを蔽ふのが常數だと、浮世の無情を嘲つのが、社會の大勞であるのは何故であるか知らぬが、偉大にして眞善美なる此の世界に、腥風悽慘、無情なる淚の多きのは何がためであるか、して之れ賢明なる宗教家や、慧眼なる立法家、治道なる理想を付せらるゝ哲學家を待て、解釋を望まんければならふ。

天眞爛熳として、常識を失ふと云ふことは、初戀の外で知ることではあるまい、左らば此の眞正なる、絶對の戀愛に由て、偕老の契を結びしものこそ、自由の成功なり、あゝ初戀の成功者は、吾人々類の天父なれ。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校受捐金廣告

金五十圓也	大日本女學會	山澤俊夫殿
金三十圓也	大森村	平林正之助殿
金三十圓也	栃木縣安蘇郡三好村	蓼沼丈吉殿
金二十圓卅錢也	米國桑港	中谷金太郎殿
金二十圓也	函館	秦慶治殿
金二十圓也	栃木縣佐野町	小島國平殿
金二十圓也	石狩上川旭川	田中敬造殿
金二十圓也	信州下伊那下久堅	瀧澤清顯殿
金二十圓也	横濱	原田竹子殿
金二十圓也	東京富士見町	河本重次郎殿
金二十圓也	明治女學校	内田トヨ殿
金十五圓也	東京新小川町	久野昌一殿
金十五圓也	調布町	中村重右衛門殿
金十五圓也	伊豫松山町	由井清殿
金十圓也	芝公園	櫻田節彌殿
金十圓也	早稲田南町	三浦篤次郎殿
金十圓也	横濱船渠會社	梶梅太郎殿
金十圓也	横濱	加藤直士殿
金十圓也	東京	木下正中殿
金十圓也	麻布中學	清水由松殿
金十圓也	龜戸柳島	上田新次郎殿
金十圓也	相州中郡金目村	宮田寅治殿
金十圓也	麹町區飯田町四丁目	松原テル殿
金十圓也	相州中郡北秦野村	古谷裕三郎殿
金十圓也	上総茂原町	武田刑部左衛門殿
金十圓也	大阪	清水芳吉殿
金十圓也	芝汐止町	矢野友代殿
金十圓也	播州龍野	富井ミ子殿
金十圓也	東京	池田成彬殿
金十圓也	日本橋區小網町	島田福太郎殿
金十圓也	富士見町	花岡正直殿
金十圓也	土佐高知	藤戸楠殿
金十圓也	相州足柄上郡中村	相原惠作殿
金十圓也	京橋區本材木町	小林大次郎殿
金十圓也	大分縣六分町	松本善助殿
金十圓也	備前岡山	富岡豐吉殿
金十圓也	大阪東區	三戸より殿
金十圓也	備前岡山	片岡寛三殿
金十圓也	巣鴨町役場	山本忠次郎殿
金十圓也	上總長生郡日吉村	平川歡次殿
金十圓也	甲州	長田敦厚殿
金十圓也	常陸眞壁郡上妻村	門井右一郎殿
金十圓也	相州足柄下郡前羽村	坂本莊次郎殿

長女満三年をむかひ感謝の心ばかりを封入差上候何かの御用のはしに御用ひ給はりたし

金一圓也	宮城縣吉岡下町	黒澤てう殿
金三圓也	紀伊新宮	鹽崎勝次郎殿

女學雜誌大賣捌　東京堂　上田屋

明治三十四年八月三十日印刷
明治三十四年八月卅一日發行

發行兼編輯印刷人　巖本善治
發行人　布川孫市
發行所　東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場
（電話番町十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

不肖感スル所アリ辯護士ノ職ニ復ス
諸費輕便ヲ旨トシ慈善的、義俠的、又
ハ貧窮者、不幸者ノ事件ハ總テ無報
酬依賴ニ應ス

東京市牛込區赤城元町九番地

明治三十四年八月

辯護士　小島宮吾

電話架設中

女學雜誌第五百十五號

明治三十二年五月十四日第三種郵便物認可

（明治卅四年八月三十一日發行）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY